

泳げる大沼をめざして

中宮 安一

暑い夏の日、午後四時半役場の終業ベルが鳴ると同時にマイカーに駆け込み、一目散に東大沼キャンプ場を目指し、到着するや否や大沼湖に飛び込み、昼間の熱った体を冷やしながら水泳を楽しんだ。

陽が落ち始めると少し寒さを感じる。今度は、数百メートル離れた国民宿舎「ユートピア大沼」の温水プールに足を向け、ひと泳ぎをしながら「暖」をとり帰宅の途に就いた。

これは、私が役場に奉職した一九七七（昭和五二）年頃の体験談です。僅か三十数年前のことですが、その頃と現在の決定的な違いは、大沼湖に飛

び込めなくなったことです。それは何故か？あまり大きな声では言いづらいのですが、大沼湖の水が汚れ「アオコ」が発生しているからである。

七飯町の人口は現在約二万九千人で、道内一四四町村中、十勝管内の音更町に次いで、人口規模第二位のまちです。しかし、大沼地区は近年過疎化の一途をたどっており、限界集落にほど近い地域です。

また、秀峰駒ヶ岳のふもと国定公園大沼を有し、一九九三（平成四）年には二九〇万人の観光客を数えた道内屈指の観光地ですが、近年では観光客の減少が続ぎ、二〇〇九（平成二一）年

度では一六五万人へと激減の一途です。

大沼はあの名曲「千の風になつて」の誕生の地です。作者の新井満さんが二〇年ほど前からこの地に別荘を持ち、春から秋にかけ仕事場としてお住いになつています。原作の一二行の英文詩を訳していたところ、文面通り訳すと簡単に訳せるが、もつと深い意味があると感じ随分と悩んだそうです。悩みあえいでいたその時、ふと気がつく別荘の窓から、木々の間を吹きわたる「風」が見え、それで英文詩が訳せたそうです。ですから、大沼は「千の風になつて」の誕生の地であると、講演会で新井満さんが明言しています。

この歌のテーマは、人の死と再生ですが、その背景にあるのは、七飯町大沼の豊かな自然です。その大沼の水が汚れ、観光客の減少と限界集落へと近づくこの地区の活性化を目指すとともに、一日も早く「泳げる大沼」にするため、一昨年九月に「大沼地区地域活性化ビジョン」を策定し、その実現を目指しているところです。

このビジョンの策定や実施計画の推



進にあたり、地域の皆さんや役場の職員及び北海道のご支援とご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げますとともに、今までの「知恵と工夫」をお貸しくださいますようお願い申し上げます。

また、時代の流れは紛れもなく「自らのまちづくりは自ら決め、その責任は自らが負う」という地域主権に向かっています。そのため、「参画・協働・自立」の精神が自治体運営に求められています。

私は四年前の二〇〇六年に町長に就任してから「夢と希望」にあふれた「住みたいまち・住み続けたいまち七飯町」を基本として町政運営を

推進してきました。

四月一七日から二期目に入った今後においても、そのことは変わるものではありません。「地域ができることは地域が、地域と行政と一緒にやった方がよいことは一緒に、行政がやるべきことは責任をもって行政が行う」いわゆる「役割分担」のできるまちが、「住みたいまち・住み続けたいまち七飯町」のあるべき姿でもあると考えています。

その一例を紹介します。今まで町内会館の管理はすべて町が行っていましたが、三年前になりましたが、ある町内会から「会館のペンキが剥がれて醜いのでペンキをください、あとは自分たちで塗ります」、「業者に頼めば五五万円、ペンキ代は一五万円で済みます」という提言がなされ、私は早速ペンキ道具一式を用意し町内会に配付しました。町内会はすぐにボランティアを募り、ペンキ塗りに励みました。

また会館内戸の開閉はできなくなっていました。ボランティアの中に建物に詳しい方（団塊の世代）がいて、

建物の外観から土台の一部が下がっていることを一目で判断し、直ぐに土台をジャッキアップし補修をして下さいました。お色直しとしっかりとした土台で、今でも築五〇年の会館は現役で活躍しています。

地方自治体の財政難は当町も勿論のことであり、町にはお金がありません。しかし我が町には二万九千人の町民の「知恵と工夫」があります。役割分担をすることで、素敵なまちづくりができるかと確信しています。

水と緑に恵まれた七飯町の環境を、将来を担う子どもたちに引き継ぐためには、町民一人ひとりの協力が必要です。

特に、大沼の水質浄化は喫緊の課題であり、地域に住む人々と「役割分担」をし、力を合わせ取り組み、一日も早く「泳げる大沼」を目指すため決意を新たにしている今日この頃です。

八なかみや やすかず・渡島管内七飯町長